蓬左

ほうさ 第23号

1985年7月

名古屋市蓬左文庫

Nagoyashi Hôsabunko

展示風より

医学書展

7.6(土)～9.1(日)

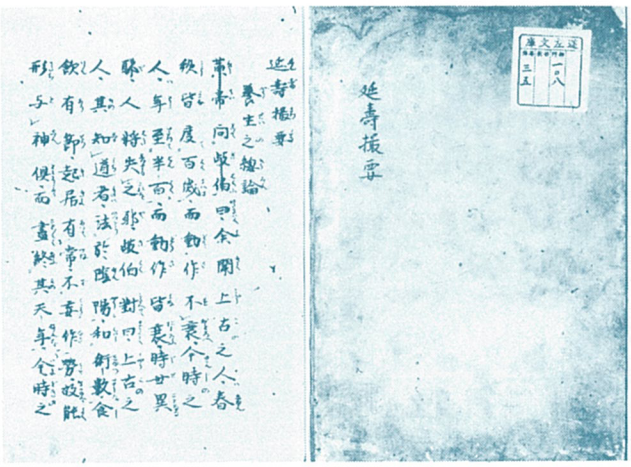
〔8.1(木)・8.2(金) 展示替休室〕

日本に学問的に体系化された医学が伝来したのは、五世紀の初頭、朝鮮半島からであった。この時伝来した医学は中国の医学であり、これ以後、19世紀に至るまで、日本の医学の主流は中国の医学であった。

中国で医学が体系づけられたのは春秋戦国時代の末（紀元前４～３世紀）である。医という字が、もとは巫祝（みこ）を意味する巫を含んだ醫であり、薬物（酒）を用いるようになって醫に変ったと言われるように、それ以前の医療が、自然崇拝による呪術信仰と経験療法によるものであったことに、中国も日本も変わりはなかった。

中国医学の古典には、**黄帝内経**－基本的な医学理論と針術を主とした治療の技法を説いたもの、「素問」と「霊枢」の２部に分れている、**神農本草経**－薬物書であり、本草学の基礎となった文献、**傷寒論**－急性熱性病の症状と治療法を述べたもの、**金匱要略**－慢性病の症状と治療法を述べたもの、があり、これらのほとんどが医学書としての形を整えたのは、漢の時代（ＢＣ206～ＡＤ220）であった。隋、唐の時代（589～907）になると、国の安定とともに国家の事業として医学書の編纂が行なわれるようになり、各種の病名、疾病の原因や症状を論じた「**諸病源候論**」、「神農本草経」の系譜をひく「**新修本草**」などが編纂され、原形のまま現存する最古の中国の医学全書「**備急千金要方**」(「**千金方**」)「**千金翼方**」も著された。つづく宋の時代（960～1279）には、「**和剤局方**」「**太平聖恵方**」「**聖済総録**」など、日本の医学書にも多大な影響を与えた書物が編纂される一方、優秀な印刷術の普及とともに国の事業として多くの重要医学書の校訂出版が行なわれた。また、この時代には、本草学が他に例をみないほど発展し、一般に「**証類本草**」と呼ばれる「経史証類大観本草」「政和新修経史証類備用本草」の編纂が行なわれている。

金(1115～1234)、元(1279～1367)の時代になると医学は儒学の影響を色濃く受けるようになり、それまで主流を占めてきた経験的、実践的な医学に代って、陰陽五行説や五運六気の説で理論づけ、それに基づいて治療法をたてた様々な流派が生まれた。この傾向は明の時代(1368～1661)にもひきつがれ、また、研究機運の高揚とともに、本草学を集大成した、「**本草綱目**」をはじめ、黄帝内経の研究書「**類経**」、「**傷寒論条弁**」、「**医学正伝**」、「**温疫論**」など多くの医書が編纂された。しかし大局的にみると中国医学は沈滞の傾向をたどり、清代(1644～1912)の末期には、西洋医学の移入が盛んに行なわれるようになっていったのである。



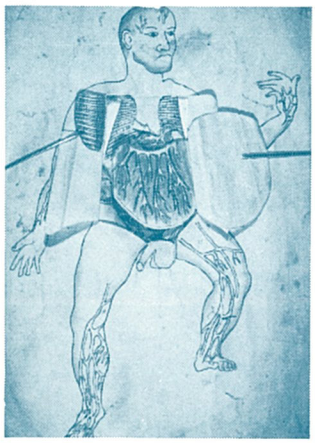
「延寿撮要」

五世紀に日本に伝来した中国医学は、平安時代に入って定着し、日本人の手による医書の編纂も行なわれるようになった。当時の形を伝える日本で作られた最古の医書「**医心方**」は、永観２年（984）に、針博士丹波康頼によって著された全30巻の医学全書である。隋代の医書『諸病源候論』に構成をならい、隋、唐、朝鮮の医書 120余種を参考にして抄出した記事を出典を明示しながら編述しているため、現在では、「医心方」によってのみその存在を知る書物もあり、古代東洋医学研究の貴重な資料と評価されている。一方、仏典の中には、インドや中国の医学の知識が含まれていたことからすでに奈良時代から僧侶の中には医療活動を行なうものが存在したが、鎌倉時代に入ると、医学の主導権を僧侶が握ることとなった。臨済宗の開祖栄西（1141～1215）は、宋から茶や桑の効用や薬用効果を伝え、「**喫茶養生記**」を著し、僧医梶原性全（1266～1337）は、「千金方」をはじめ、「和済局方」「太平聖恵方」「聖済総録」などの中国の医書を参考に仮名まじり文による医学全書「**頓医抄**」を著した。しかし、室町時代の末になると、明に留学した医師達が、儒教色の強い金元時代の新しい医学を伝え、安土桃山時代を経て江戸時代の前期に至るまで、この医学が主流を占めることとなった。それが「**啓迪集**」をはじめ多くの医書を著わし、日本医学中興の祖と呼ばれた曲直瀬道三、「**延寿撮要**」等を著わした玄朔と続く、道三流医学である。中国医学が完全に日本に同化され、日本式の中国医学、漢方として発展しはじめたのもこの時期であった。そして江戸時代に入ると、漢方は日本独自の発展を見せ、道三流の金元医学に対して中国の古典を重視する古医方の一派をはじめ、西洋医学も交えて様々な流派の展開を見たのである。一方、医術を志すものの増加とともに、江戸時代には古典から最新の医学に至るまで数多くの医学書が出版されるようになり、中国医学書の諺解（漢文を和文に直し、要点を解説したもの）を中心に、40種余の医学書を著わした近松門左衛門の弟岡本一抱などという人物も登場した。

日本にはじめて西洋の医学が伝えられたのは、16世紀の半ば、イエズス会の宣教師による布教活動とともにであった。鎖国が完成してからも、幕府は、西洋医学の摂取に積極的で、オランダ人医師による治療と医者の教育をオランダに求めたため、オランダ流医学が形成されるに至った。八代将軍吉宗による洋書輸入の緩和は、「解体新書」の翻訳出版に代表される蘭学の隆盛を招来し、医学に限らず、諸科学における近代科学の発展を準備することになったのである。

当文庫の前身である尾張藩の御文庫には、数百種の医学書が所蔵され、内容的にも和漢の古典をほとんど網羅した充実したものであったことが、当時の蔵書目録から推定される。徳川家康自身、自ら薬を調合したと伝えられるほど医薬に関心のある人物であり、家康の遺書として尾張藩が譲られた駿河御譲本の中には、「素問霊枢」「証類本草」をはじめ13種の中国、朝鮮で出版された医学書が含まれていた。ついで、尾張藩初代義直二代光友の蔵書の中にも医学書が見られるが、最もその収集に力を注いだのは四代吉通であった。彼は、医学を学び、珍しい医学書や薬を集めて研究し、自ら薬を調合したと言われ、記録に残る蔵書中のほとんどが医学書で、212種に及んでいる。しかし、記録によると、吉通の集めた医学書は、明治初年の払い出しによって全て処分されてしまっている。光友の集めた医学書についても同様で、御譲本では、現在重要文化財に指定されている「太平聖恵方」、義直の蔵書では、「延寿撮要」他２種が残るのみである。

現在の蓬左文庫には、100種を越える医学書が所蔵されている。そのほとんどが、尾張藩時代からの蔵書であることは、蔵書印等から明かで、中国医学の古典と江戸時代の日本の医学書が中心である。その他、尾張医学館浅井家の手を経て入ったと見られる京都の仁和寺等が所蔵した中国や日本の古医書の模写本、名古屋城三の丸の尾張洋学館備え付けのテキストであったアムステルダム版（1765～75）のオランダ語の医学書、さらに、特別な装丁の施された献上本を含む、当時全国をリードした尾張本草学の著作など、現在の蓬左文庫にも多彩な医学書が所蔵されている。



「紅毛銅人形図」

紅毛銅人形図

天和２年(1682)、オランダ通詞本木庄太夫による日本で最初のオランダ語医書からの翻訳書「阿蘭陀経絡筋脉蔵腑図解」(おらんだけいらくきんみゃくぞうふずかい)の写本。原典は、レメリン著 "Pinax microcosmographicus"（1667）という素人向の解剖書。内蔵の形をした紙が一枚一枚重ね合わせてあり、表面からめくっていくと深層のものが表われてくる構造になっている。天和２年当時は、一部の人たちの知識欲を満たすにとどまり、90年後の明和９年（1772）「和蘭全体内外分合図」として出版され世間の注目をあびた。尚、当文庫の「紅毛銅人形図」が「阿蘭陀経絡……」の写本であることを御教授下さったのは酒井シヅ氏である。また、紺地に金泥で秋草が描かれ、中央に金の題簽のある折本、木箱入りと、装丁から見ても、天和２年からそれほど遠くない時期の写本と推定される。

参考文献

酒井シヅ　「日本の医療史」　東京書籍
長浜善夫　「東洋医学概説」　創元社
服部敏良　日本史小百科「医学」　近藤出版社

「医学書展」出品目録

〈医　学〉 漢　方

1．黄帝内経素問　江戸中期刊　9巻9冊
2．黄帝内経霊枢　同　9巻6冊
3．黄帝内経素問註証発微
明・馬蒔撰　寛永5年刊　9巻12冊
4．黄帝内経霊枢註証発微
同　同　9巻6冊
5．黄帝素問直解
清・高世栻注解　康熙34年刊　8冊
6．黄帝内経太素
隋・楊上善撰　江戸中期写　30巻23冊
7．黄帝内経明堂
同　天保2年写　1巻1冊
8．黄帝内経素問要語
竹田通菴撰　宝永3年刊　13冊
9．素問玄機原病式
金・劉完素撰　元禄3年刊　2巻2冊
10．傷寒論
漢・張機撰　清刊　7巻5冊
11．傷寒論
清・張志聡注　康熙22年刊　6巻6冊
12．校正傷寒論
宋・林億校正　寛政9年刊　10巻3冊
13．傷寒論文字攷
伊藤子徳　嘉永4年刊　2冊
14．傷寒論文字攷続篇
同　同6年刊　2冊
15．校正金匱要略　享和元年写　3巻3冊
16．難経本義諺解
岡本為竹　宝永3年刊　12巻12冊
17．温疫論
明・呉有性撰　明和6年刊　6巻6冊
18．刻王氏家宝傷寒証治明條備覧
明・王震撰　万暦6年刊　6巻6冊
19．傷寒述微
清・李栻撰　刊(順治3年序)　3巻1冊
20．新刊通真子補註王叔和脉訣
晋・王叔和撰　朝鮮刊　3巻1冊
21．鍥太上天宝太素張神仙脉玄微綱領宗統
明・張太素撰　万暦27年刊　7巻3冊
22．銅人腧穴鍼灸図経
宋・王惟一撰　万暦年中拓本　3巻10冊
23．大徳重校聖済総録
宋・徽宗敕編　寛政10年写　200巻206冊
24．新本聖済総録存疑
山崎克明撰　写　2巻2冊
25．寿親養老新書
宋・陳直撰　朝鮮刊　4巻4冊
26．十四経発揮
元・滑寿撰　寛文5年刊　3巻1冊
27．　同
同　寛政10年再版　3巻1冊
28．赤水玄珠
明・孫一奎撰　万治3年刊　36巻37冊
29．赤水玄珠医案
同　明暦3年刊　13巻14冊
30．医学正伝或問諺解
岡本為竹　享保13年刊　8巻8冊
31．張氏医通
清・張璐撰　清刊　27巻40冊
32．外科大成(瘍科十種)
清・祁坤撰　寛政8年活字版　4巻8冊
33．訂正東医宝鑑
朝鮮・許浚撰　享保9年刊　25巻25冊
34．孫真人備急千金要方
唐・孫思邈撰　万治2年刊　70巻25冊
35．太平聖恵方
宋・王懐隠撰　永正年中写　100巻51冊
36．重刻太平恵民和剤局方
宋・陳師文等撰　正保4年刊　10巻11冊
37．瑞竹堂経験方
元・沙図穆蘇撰　寛政7年活字版　15巻3冊
38．新刊彙集完真妙諦捷径并附経験奇方
明・冥了撰　刊(天啓5年序)　3巻3冊
39．救急方　朝鮮刊　2巻2冊
40．医心方　丹波康頼著・丹波元惠校
江戸末期写　30巻20冊
41．医心方大意
横山春造　江戸末期写　1冊
42．喫茶養生記（群書類従巻368）
栄西
43．医学天正記　（名古屋市博物館蔵）
曲直瀬道三　寛永4年刊　1冊
44．延寿撮要
曲直瀬玄朔　江戸初期写　1冊
45．鶴林医綱
轟竹隠　江戸初期写　9冊
46．医家秘韞
同　同　13冊
47．病家示訓〔医者雀〕　江戸中期写　1冊
48．東洞先生遺稿
吉益為則　寛政12年刊　3巻3冊
49．病名彙解
桂洲　江戸中期刊　7巻6冊
50．松甫集〔救詳鑑・日用家方集〕
江戸中期写　2冊
51．扁鵲倉公列伝割解　浅井図南著・浅井正路補
明和7年刊　2巻2冊
52．黄鍾録
山崎克明　享保元年刊　1冊
53．養生訓
貝原篤信　天保5年刊　8巻4冊
54．家蔵秘巻
竹田子龍（三益）　江戸末期刊　1冊
55．志都能石屋〔医道大意〕
平田篤胤　刊　2巻2冊
56．蛸志
喜多村直　刊(嘉永2年序)　3巻3冊
57．田子養生訣
田中雅楽郎　江戸末期刊　1冊
58．金瘡一流秘伝抄　江戸中期写　1冊書付1通
59．軍旅用医巻　同　1冊

60. 釣玄全書（外科篇）
奥田周道　江戸末期写　4巻3冊
61. 馬医聞書　江戸中期写　1折
62. 図法鍼灸経
轟竹隠　江戸中期写　1軸
63. 意斎流針書　正徳3年写　1帖
64. 灸点図解　写　1冊
65. 病草紙　平安末～鎌倉初期写　1軸
（国宝関戸家蔵本昭和42年複製）

66. 諸病主薬・十四経穴分寸歌・五蔵六腑変化傍通訣
（名古屋市博物館蔵）天保10年尾張医学館蔵版　1冊
67. 薬性歌括　（同）　1冊

蘭　方

68. 阿蘭陀流外科指南　宝永2年刊　5巻1冊
69. 紅毛銅人形図　江戸中期写　1冊
70. 解体新書
杉田玄白等訳　安永3年刊　5巻5冊
71. 解体発蒙　（昭和10年複製）
三谷樸　（文化10年刊）　5巻5冊
72. 和蘭内外要法
吉雄常三訳　文政3年刊　8巻8冊
73. 西説医範提綱釈義
宇田川璘（玄真）　弘化2年刊　3巻3冊
74. 医範提綱附図　江戸末期刊　1帖
75. 解剖諸事留
伊藤圭介　昭和10年写　1冊
76. 暎咭唎国種痘奇書
伊藤圭介校　天保12年刊　1冊
77. 種痘良法奇書　嘉永2年刊　1枚
78. 疱瘡洗薬之法　写　1枚
79. 牛痘諸説　織田貫斎訳　写　1冊
80. 暴瀉病手当素人心得書
独・オシャンデル著、伊藤圭介訳　文久3年刊　1冊
81. De Artz, of Genees-heer; in aangenaame spectatoriaale Vertoogen　6 Deel in 12V
Amsterdam, 1765-71
82. Verzameling van Mengelschriften　5V
Amsterdam, 1767-69
83. Naleezing van den Artz, of Geneesheer; in aangenaame spectatoriaale Vertoogen　4V
Amsterdam, 1773-75
（西洋内科明弁　付伊藤圭介筆目録1冊）

〈薬学・本草学〉

84. 新修本草
唐・李勣等撰　写　11巻11冊
85. 同
同　仁和寺蔵本写　5巻5冊
86. 新修本草
同　天保5年写　1巻1冊
87. 重修政和経史証類備用本草
宋・唐慎微撰　成化4年刊　30巻25冊
88. 本草綱目
明・李時珍撰　寛文12年刊　56巻38冊
89. 本草発明蒙筌
明・陳嘉謨撰　明刊　14巻8冊
90. 本草原始附雷公炮製
明・李中立撰　明刊　12巻8冊
91. 大和本草
貝原篤信　宝永6・正徳5年刊　19巻10冊
92. 大和本草紀聞　江戸末期写　10巻10冊
93. 本草図譜
岩崎常正　江戸末期写（自筆本）　2巻2冊
94. 真影本草
吉田高憲　安政4年刊　1冊
95. 本朝食鑑
平野必大　元禄10年刊　12巻10冊
96. 本草正譌
松平秀雲　安永5年刊　12巻6冊
97. 本草正々譌
山岡恭安　安永7年刊　1冊
98. 本草正々譌刊誤
杉山維敬　安永8年刊　1冊
99. 物品識名
水谷豊文　文化6年刊　1冊
100. 同
同　江戸末期刊　2巻2冊
101. 物品識名拾遺
同　江戸末期刊　2巻2冊
102. 泰西本草名疏
伊藤圭介訳　文政12年刊　4巻3冊
103. 日本植物図説（草部イ）
伊藤圭介　明治7年刊　1冊
104. 本草会物品目録
嘗百社編　天保6年刊　1冊
105. 草木性譜　（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）
舎人重巨　刊（文政10年跋）　3刊3冊
106. 有毒草木図説（同）
同　文政10年刊　2巻2冊

107. 南庭官庫医書目録　江戸末期写　1冊
108. 御文庫御書籍目録　寛政年間写　12冊
同　同　6冊
109. 御側御文庫書目録　写　2冊
110. 尾張名所図会　前編
岡田啓等編　刊（天保15年序）　7冊

次回展示は

徳川義直の蔵書と著述

Ⅰ．9／28(土)～10／29(火)
Ⅱ．11／1(金)～12／1(日)

コラム

蓬左文庫の蔵書印

その16．神村家の蔵書印

付・蓬左文庫の蔵書票

織　茂　三　郎

本文庫の蔵書中には、藩士たちの献納本などもすくなくない。この神村家本もその一つで、国学関係の善本が多い。神村氏は岐阜の出身で、正鄰(まさちか)のとき、京都に学び、歴史・有職・神道などにくわしかった。宝暦5年(1755)、尾張藩八世宗勝に召されて右筆役に任じ、好学の殿さま宗勝のお気に入りとなったが、生来の病弱から四十四歳で逝去した。後嗣がなかったので、友人らが相談の結果、その門人鈴木忠貞を推して養子とすることを藩にねがい、明和9年（1772）その許可をえたが、これはきわめて異例に属する。しかし、忠貞もまた天明元年(1781)四十二歳で没したため、神村家は断絶したが、その蔵書の一部は藩の文庫におさめられ、今日に至っている。神村父子の時代は江戸中期も終りに近い頃であるが、尾張では、学術がいちじるしく興隆・普及し、宗勝・宗睦父子の努力もあって藩校明倫堂の開設も実現している。このように文運が開けるなかで、神村らは河村秀根・稲葉通邦らといわゆる紀典学派とよばれる古典研究のグループをつくり、多くの業績を挙げた。

さて、神村家の蔵書印には、長方形のものが二種ある。ひとつは「尾藩神邨恭敬斎蔵」とあって、43mm×22mm、他は単に「神邨家蔵」の四字で、37mm×16mmの小型印である。前者のうち“恭敬斎”は正鄰の号であるから、正鄰時代の印、後者は忠貞の代に変ってからのものであろう。凸版に用いたのは、前者は「東野州聞書」、後者は「印章備号」の印で、どちらにも「尾府内庫図書」の蔵印がきちんと捺され、藩の文庫がこれらを公式に受け入れたことを示している。

なお、神村本には「土佐日記」「大和物語」「原中最秘鈔」（正鄰筆）「四季物語」「ちくさ」などのほか、「論語集解」のような貴重本もある。これは、鎌倉時代の古写本(10冊本)で、箱書に「京都佐野紹益法眼所蔵、安永三年三月八日、尾張神村忠貞」とあり、重文の指定をうけている。

「尾藩神邨恭敬斎蔵」印

「神邨家蔵」印

蔵書印と似たものに「蔵書票」がある。これは、印肉を用いて書籍そのものに捺すのと異り、好みの文字や絵画等を印刷した適当な大きさの紙を、書籍の一部に貼りつけるわけだから、蔵書の所属を明らかにする意味では似ているが、両者は一応、区別すべきであろう。蔵書票の出現は比較的あたらしく、一般には近代に入ってからで、好事家の手によって、優雅・華麗・奇抜など、いろいろなものが作製され、カラー印刷などによる凝ったものも多い。蔵書印の場合、とくに和漢書は、一度押した印記は、除去することはほとんど不可能に近いから、その所属の確認という意味ではこの方がすぐれている。これに対し、蔵書票は、随時、はがすことが可能なので、好都合な場合もあろう。要するに一長一短といえよう。

蔵書票

さて、蓬左文庫にも蔵書票が一時もちいられ、蔵書印と併用された古書もある。縦長(84mm×44mm)の厚手の和紙に、黒い木版刷り、上方に葵の紋をはさんで「不許出門」とあり、おおむね表紙裏の左肩口に貼られている。作製年代は昭和の初年である。

（元蓬左文庫調査研究員）

出版物一覧

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S．50年刊)	3,500円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S．51年刊)	4,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(　同　)	2,500円
尾崎久弥コレクション目録第一～三集 (S．52～55年刊)	各 1,500円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S．53年刊)	2,000円
名古屋叢書続編　索引(S．47年刊)	700円
名古屋叢書続編総目録(S．44年刊)	400円
善本解題図録第一～三集(S．55年再版)	各 300円
日本の古典〈蓬左文庫図録〉(S．52年刊)	200円
蓬左文庫・源氏物語図録(S．53年刊)	300円
蓬左文庫所蔵古地図複製　No.1～No.13	
No.12　海東郡(S．60年刊)	
No.13　海西郡(　同　)	
(S．55～60年刊)	**各 1,800円**
御本印型書鎮(S．58年製)	**1,000円**
名古屋叢書三編第12巻(S．56年刊)	**3,000円**
同　第8巻(S．57年刊)	**3,000円**
同　第16巻(　同　)	**3,000円**
同　第19巻(　同　)	**3,000円**
同　第17巻(S．58年刊)	**3,000円**
同　第4巻(S．59年刊)	**3,000円**
同　第9巻	
―松濤棹筆(抄)上―(S．60年刊)	**3,000円**
同　第11巻	
―楽寿筆叢他―　(　同　)	**3,000円**
同　第18巻(1)	
―横井也有全集　下(1)―(　同　)	**3,000円**
同　第18巻(2)	
―横井也有全集　下(2)―(近　刊)	**3,000円**
堀田文庫蔵書目録(S．58年刊)	**500円**
蓬左文庫図録(　同　)	**1,500円**
蓬左文庫絵葉書〈8枚組〉(　同　)	**300円**

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

▷▷▷ 利用ご案内 ◁◁◁

▷開館時間　午前9時30分～午後5時

▷休館日　毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)

祝日(日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館／月曜　〃　月・火休館)

年末年始(12月28日～1月4日)

▷閲覧　館内に限り、館外貸し出しはいたしません

(閲覧料)普通図書　無料

重要図書　有料(1部350円)

▷展示　随時蔵書の一部を展示

(特別展を除き入場無料)

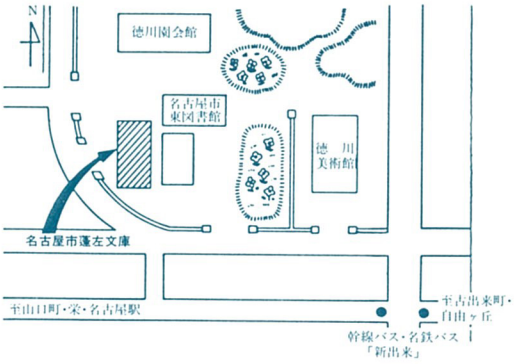
▷複写サービス　普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935－2173

〈名古屋駅から〉市バス(基2)「自由ヶ丘」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
〈栄　か　ら〉市バス(基2)「引山」「自由ヶ丘」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第23号　☆昭和60年7月6日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2－3－18)